

その罪をよこせ！ ルカによる福音書 2：1－7

02:01 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。02:02 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。02:03 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。02:04 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。02:05 身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。02:06 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、02:07 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

イエスの降誕物語は冬の寒さの中に温かい家庭の団欒をイメージさせます。けれども、聖書に記されているイエス誕生の物語は、過酷なものです。

皇帝アウグストゥスの人口調査。紀元前7年に第1回目の人口調査が行われたようだと言います。ローマ帝国は世界中の諸国を武力で征服し、統一しました。人口調査は各地の状況を調べ、課税や徴兵などのために行われました。これは極めて強引なものでした。人々にはそれぞれの生活があるのです。それを中断して、自分の生まれ故郷に帰らなければなりません。こうした人口調査によってユダヤの中では武力で立ち向かおうとする動きも出てきました。熱心党と呼ばれる人達で、イエスの弟子の中にも熱心党員がいました。当然、これに従わなかった人々もいたようです。この人口調査には希望も与えられていたと言います。郷土権という権利が与えられるという約束です。この郷土権を持つ人は自分の土地をもつことができました。旅をするのは大変だが、郷土権がもらえるなら・・・。アメとムチです。こうして人々はコントロールされました。

ヨセフは家柄だけは立派だったようです。ダビデの家、その血筋・・・。けれども実際は、ナザレという田舎に住む農夫だったと思われれます。ベツレヘム出身ですからナザレではよそ者であったということです。日雇いの農夫であった可能性もあります。大工であったということですが、当時はほとんどの人が農夫で、大工という立派な職業が成り立つような分業の社会ではありません。大工というのはイエスを軽蔑して「この人は大工の子ではないか。」と言われている箇所という言葉です。つまり大工というのはちゃんとした職業ではなく、ちょっとした手仕事をして手間賃を稼いでいた蔑みの対象であった人々の一人だということです。

ヨセフは MARIA をつれて故郷に帰ります。土地がもらえるという希望を持って。ところで MARIA について「身ごもっていた、いいなずけ」という奇妙な表現をしていることにお気づきでしょうか。現代の若者は「できちゃった婚」なんていって当たり前のように結婚していきます。現代ではそのことをとりたてて非難することもしません。けれども当時のユダヤはそういう社会ではありませんでした。これは一大事なのです。死刑になる可能性すらありました。「身ごもっていた、いいなずけ」という表現は、ヨセフの子どもではない子どもを宿した MARIA を、結婚の相手として受け入れたということの意味しています。どんな苦悩を二人が乗り越えて結婚しようとしていたか、想像することもできません。でも、「一緒に登録する。」それはかすかな希望だったに違いありません。

長旅で疲れきった彼らに、危機が迫ります。宿る場所が見つからないときに、産気づいたからです。MARIA は覚悟を決めたかもしれませんが、ヨセフはどんなにあわてたことでしょうか。生まれてきた幼子を寝かせる場所は、飼い葉おけ。彼らが入り込んだのは、にわか作りの家畜小屋か洞窟であったろうと言います。クリスマス物語では、美しいイメージの「飼い葉おけ」ですが、実際は家畜の餌箱ですよ。私は牛の餌箱を見たことがありますが、それはもう牛のよだれでベチャベチャ、グチャグチャのきわめて不潔なものでした。MARIA が神の子にしてあげられた精一杯のことは、布にくるむということだけでした。

ヨセフは郷土権と土地を手にしたのでしょうか。その願いは見事に裏切られました。「泊まる場所がなかった。」「居場所がなかった」とも訳せます。これが彼らを待っていた過酷な現実です。イエスはナザレ人として育ったということですから、この後、どのような紆余曲折があったかはわかりませんが、ヨセフは妻と幼子連れてナザレに帰ったのでしょう。

現代の心理学は、幼児期の体験、胎教や出生の状況が人格形成に大きな影響を与えと言います。出生前後の環境が一生消えることのないトラウマにさえなるのです。イエスは、そういうものの刻印を受けたことはほぼ確実でしょう。ある人は、イエスは幼児期に虐待を受け精神疾患を患っていたと断言しています。この後、福音書に記されているイエスの人生は、十字架に向かう受難の物語です。

神がこの世界に登場されるのに、なぜこのような悲惨な人生の始まりを選ばれたのでしょうか。神はこのような悲惨な姿で地上にこられるときに、世界に、私たちに、何を語っておられるのでしょうか。それは、「その罪を、わたしによこせ！」です。イエスの受難と十字架が示していることは、神が私たちの罪を、私たちの苦しみを、ことごとく、ことごとく、ご自分のものにされる決意をされたということです。

このルカによる福音書2章から始まる降誕物語では、イエスは何も語りません。無言の幼子としてここにいます。けれどもその声は大音響で響き渡っています。詩篇19にこうあります。「話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくとも、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう。」神は今日も、今ここで、語っておられます。あなた方の罪を、その苦しみを、ことごとくこっちによこせ！ わたしたちがどうしてもなく抱えている罪とその重荷を、神はわたしたちからねじりとってしまわれた。なんとも乱暴で強引な仕方です。今、あなたにも、そうしようとしておられます。